

保育者育成の造形表現におけるモダンテクニックの技法活用と考察 — 幼児教育科の造形表現の授業をとおして —

吉 垣 隆 雄*

Utilization and Consideration of the Modern Technique in Modeling Expression for Childcare Worker Training Course

— Through Modeling Classes in Department of Early Childhood Education —

Takao Yoshigaki

【キーワード】 幼児教育, モダンテクニック, 造形表現活動, 保育者育成

Early childhood education, modern techniques, modeling expression activities, childcare

はじめに

幼児教育現場において、造形表現活動の持つ役割ははかりしれない。子どもたちは、表現対象としての自然や造形物を感じ取り、これをとおして表現活動することで表現力や創造力を高め、その過程や結果（作品）をとおして社会と個人の関わりの中で人間性を育て豊かな心情や情操を養うことを目標としている。その意味から子どもたちと造形活動で関わる指導者自身の造形に対する感性を高めていくことが大切となってくる。

残念ながら、幼児教育を目指す学生だけではなく、現場で日々指導や支援に携わっている幼稚園教諭や保育士および小学校教諭の中に造形や図画工作が苦手という指導者も少なくない。本学の幼児教育科に入学した学生に「造形表現Ⅰ」の初回の授業でアンケートを取った際、図画工作や美術が苦手な分野であると回答した学生が相当数いた。また、学生だけでなく、本学において実施した幼稚園教諭・小学校教諭対象の教員免許状更新講習（選択講座）で筆者が担当した「造形表現・図画工作の理論と実践」の講習において事前に実施した意識調査では、講習を希望した理由に「自身が図画工作は得意でない」という苦手意識や不得意さなどの意識も目立った¹⁾。

このような苦手意識や不得意さなどの意識は、造形表現・図画工作・美術の表現活動教育を進めることに対して消極的な起因となる。幼児の頃に楽しんだ表現活動がいつしか嫌いで苦手な分野となるのは何故だろうか。その要因のひとつに、幼児期から小学校に就学し、中学年・高学年になるにつれリアリズムの見方が芽生え、そのリアリズムに見合った表現力が伴わない、つまり見えているものや想像したことが「うまく絵に描けない」という思いが継続していることにある。中学校に入るとそのような苦手意識は「好きでない、嫌い」という意識に変わってきていることが多く、高等学校では選択教科の中の

所属および連絡先

* 大阪千代田短期大学

「美術」を避け、その意識を抱いたまま大学に入学してくる学生も少なくない。このような学生に対し、描画指導における「形の捉えかた」や「色の理論」を指導していくことも重要ではあるが、「モダンテクニック」を使うことで自身の持つ表現力とは別に偶然にできる形や色を純粋に楽しむことをモチベーションとした意識改革も有効方法だと考える。また、実際の幼児教育現場で表現方法として利用できることも大きい。

1. 研究の方法と「図画工作・美術」に対する学生の意識

2019年度本学幼児教育科に入学した学生（71名）に「表現技術 造形Ⅰ」の初回の授業でアンケートを取った結果、以下のような結果となった。

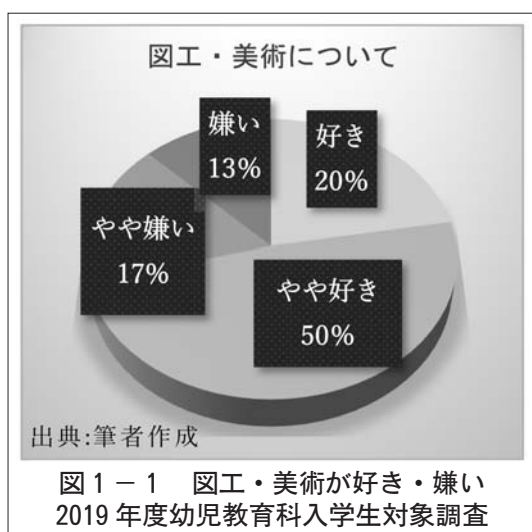
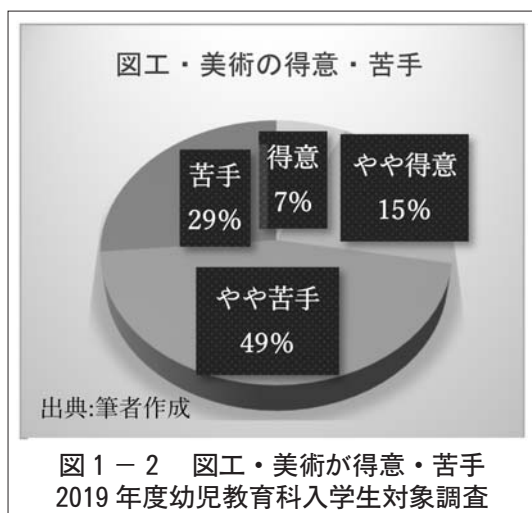


図1-1に示すように、「図工・美術は好きですか」という設問に対して、「好き」と答えた学生は71名中14名、「どちらかといえば好き（やや好き）」は36名、「どちらかといえば嫌い（やや嫌い）」は12名、「嫌い」と答えた学生は9名いた。結果、「好き」・「やや好き」を合わせて70%、「嫌い」・「やや嫌い」を合わせて30%であった。この「好き」・「やや好き」と回答した学生数が「嫌い」・「やや嫌い」を上回りほっと胸をなでおろした。



ところが「図工・美術は得意ですか」という設問に対する回答は、図1-2に示すように「得意」と答えた学生は5名、「どちらかといえば得意（やや得意）」が11名、「どちらかといえば苦手」が35名、「苦手」が20名いた。「得意」・「やや得意」を合わせて22%、「やや苦手」・「苦手」を合わせて78%という結果で、苦手意識が圧倒的に多数を占めた。

さらに図1-3に示すように、「好き」・「やや好き」と答えた学生（50名）の中から苦手意識を調査したところ「得意」は5名、「やや得意」は11名、「やや苦手」は29名、「苦手」は5名おり、「図工・美術が好き」と答えた学生でも「得意」・「やや得意」を合わせ32%、「やや苦手」・「苦手」を合わせて68%もあり、好きであっても苦手とする数が多かった。

また、図1-4のように「やや嫌い」・「嫌い」と答えた学生（21名）の中から苦手意識を調査したところ「得意」は0名、「やや得意」も0名、「やや苦手」は6名、「苦手」は15名おり、「得意」・「やや得意」を合わせて0%、「やや苦手」が30%・「苦手」が70%で、「やや苦手」と「苦手」を合わせて100%という結果であった。

この結果から見てくることは、

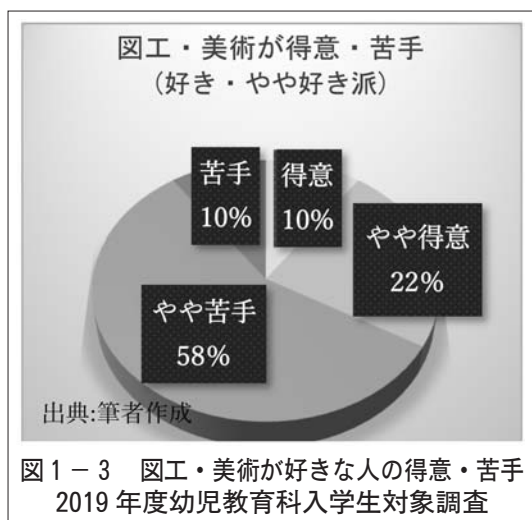


図1-3 図工・美術が好きな人の得意・苦手
2019年度幼児教育科入学生対象調査

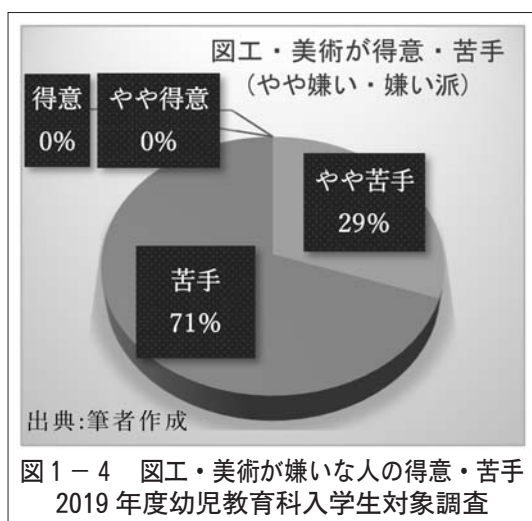


図1-4 図工・美術が嫌いな人の得意・苦手
2019年度幼児教育科入学生対象調査

・「図工・美術が好き・嫌い」という感情は、苦手意識が大きく反映している。

・「好き・やや好き」であっても「得意・やや得意」の人数は多くない。
ということである。

つまり、全体的に「表現する」ことはどちらかというと苦手といった意識の方が強く、「図工・美術が嫌い、やや嫌い」と回答している者は全員苦手意識があるということになる。何故苦手なのかは「うまく表現できないから」といった内容が多数を占めていた。うまく表現できないことが、図工・美術離れに結び付き、その意識がさらに表現意欲の欠如や造形表現を肯定的でない方向に向かっているといった現実がある。

教育者のハーバート・リード (Read.H) は「芸術による教育 (Education Through Art)」の中で「子どもはみな0歳から『表現』している」また、「人は誕生の瞬間から『表現』を渴望している」と語っている。にもかかわらず、保育者をめざす人たちが「表現」に対しての苦手意識や「嫌い」といった感情を持っている。これらの苦手意識が教育現場での造形表現活動の指導を消極的にしていることは、忍び難い。

的にしていることは、忍び難い。

本学の「表現技術 造形 I (前期)」の授業では、1コマ90分15回の授業の中で、「表現」とは何かを考えることから始め、表現技法として幼児教育現場で「造形遊び」としても用いることのできる「モダンテクニック」を活用を行うことで少しでも「苦手意識」を軽減し、造形表現活動が「嫌い」といったイメージを払拭につながればと考え実施した。

2. モダンテクニックの技法説明と実践

造形表現では、クレパスや色鉛筆で描いたり、筆で水彩絵の具を彩ったりするだけでなく、様々な技法で筆では出せない味わいのあるものや偶然的な美しいものができたりする。表現方法にこういったものを活用することで、「造形あそび」やイメージにあった効果を出すことができ、子どもたちが形や色の発見とともに表現の手助けにもなる。授業では、表1の授業計画に基づき、モダンテクニックの学習と演習を行った。

表1 「表現技術 造形 I (2019 年度前期)」授業計画表

回数	授 業 概 要
1	オリエンテーション、ガイダンス、自己紹介と課題「ひよこの環境づくり」
2	・課題のプレゼンテーション(個人・半数)① ・講義「子どもの感覚の発達」
3	・課題のプレゼンテーション(個人・半数)② ・講義「幼児と造形表現」
4	幼稚園教育要領・保育所保育指針における領域「表現」について
5	・造形表現活動の指導について ・モダンテクニック「にじみ」の表現
6	・モダンテクニック「デカルコマニー」の表現 ・「フロタージュ」の表現
7	・モダンテクニック「ドリッピング」の表現 ・「マーブリング」の表現①
8	・モダンテクニック「マーブリング」の表現② ・「スクラッチ」の表現① (各色の塗込み)
9	・モダンテクニック「スクラッチ」の表現② (黒色の塗込みと削り)
10	フィリピン大学からのゲストとの交流会 (スクラッチの活用・Tシャツ作り)
11	・モダンテクニック「パチック」の表現・「モダンテクニック振り返りシート」による考察と記入
12	・実習(観察実習)にむけて「造形遊び」 ・「幼稚園の掲示物」の制作
13	・実習報告(レポート) ・モダンテクニック「コラージュ」の表現①-三角形で遊ぶ-
14	・「学び」の確認試験 ・モダンテクニック「コラージュ」②作品制作「三角形の集合」
15	・「学び」の確認試験返却と内容確認 ・課題「折り紙ノート」の作成について

以下、モダンテクニックの学生への説明内容とそれぞれの技法を実施した後の学生の反応(「振り返りシート」の記入)の一部を抜粋して記述する。

2-1. にじみ

画面をハケやスポンジを使って水でよく濡らしておき、乾かないうちにいろいろな絵の具の色を置いて図柄をつくる技法である。絵の具の濃度を変えることによって色の濃淡や混合、偶然にできる形などの変化を楽しむことができる。紙が乾いてきてにじみにくいようであれば上から水の入った霧吹きなどを使って紙に水を補充していくようにする。また、絵の具だけでなく水性ペンで描いた後で紙をぬらして湿らすとペンの色が溶け出してにじんていく。にじませたくない所は油性ペンを使うとよい。

活用については、にじみによる色遊びだけでなく、何か具象形に切った紙の上でにじみを行ってデザインしていくのも面白いし、にじみで作った紙を乾かしてから、様々な形に切って、別の用紙に貼り絵として利用することもできる。紙の代わりとして布を使うと紙の場合とは違ったにじみ方を楽しむこともできる。

各々の技法については、子どもたちが造形表現活動をしていく中で何をねらいや目標にするのかを示すようにした。

にじみについては以下の3点を抑えるようにした。

- ・にじみによる混色の美しさに気づき楽しむ。
- ・水彩絵の具や画用紙などの素材の特徴に気づく。
- ・出来上がる模様を作品作りに活かす。

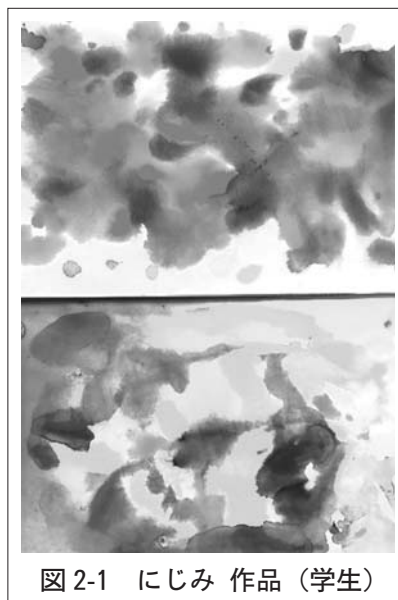


図2-1 にじみ 作品 (学生)

終了後、実施した振返りシートには「始める前に画用紙にいったい水で湿らせると次に置く絵の具はどのようになるのだろうかと気持ちがわくわくした」・「今まで描くことが多かったが、絵の具をポタッと垂らすだけで表現できるなんてすごい。子どもたちも楽しめそうだ」・「色が膨らんでいくのが面白い」など技術的なことから解放され、偶然できる形や色の混色に興味を示すとともに園での教材としての積極的に活用等も記載されていた。

2-2. デカルコマニー（仏: Decalcomanie）



図2-2-1 授業での制作の様子

紙の上から濃い目の絵の具を置き（たらし）て、上から別の紙を押し当てたり、紙を2つ折りし圧して図柄をつくる。2つ折りの場合は紙を開くと対象形の形ができる（→ シンメトリー）。対象形ということで何かを予想して絵の具を置いていってもよいが、この特徴にとらわれすぎるとイメージが限定されてしまうので、対象形を意識しないで絵の具を置き、圧して広げてから何に見えるかなど想像することもできる。部分的に絵の具を少し薄める（水で溶く）ことで、色が混ざり合う、にじみができるなど混ざり具合の違うのもでき

る。以上に基づいて実践を行った。（図 2-2-1、図 2-2-2）
デカルコマニーを実践していく際のねらいについては

- ・形にこだわらずに自由に色遊びができる中で面白さを感じる。
- ・置かれた絵の具が紙を合わせることでできる形や色の美しさを感じる。
- ・出来た形を見て「～みたい」などの見立て活動をして創造性を育む。

の3点を取り上げた。

終了後に実施した振返りシートでは、「絵の具をつけ画用紙と画用紙を合わせたり、半分に折ってくっつけるだけでかんたんに一つの作品ができることに驚いた。子どもたちと一緒にしてみたい」「絵の具や水の量によって色の濃さや広がり方が誓って面白かった」「対象になった時の形を想像しながらこんな風になるのかなと工夫してみた」などで楽しみながら思わぬ形の発見にもつながっていたようである。

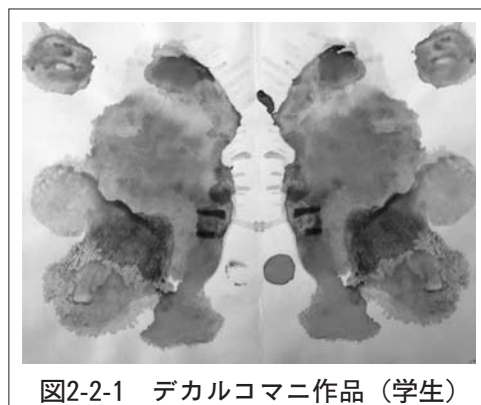


図2-2-1 デカルコマニー作品（学生）

2-3. フロッタージュ（Frottage）

20世紀初頭のシュールリアリズムの流れの美術家マックス・エルンストによってはじめられた（1925）もので凹凸のあるものの上に紙をあて上から鉛筆やクレヨンなどで擦ると凸部が濃く模様となって紙の上に浮き出てきて簡単に写し取ることができる。この方法を使って複雑な模様を写し取り、それらを切って部分的に魚や動物のうろこの模様として利用することもできる。写すには硬い画用紙は不向きで、凹凸になじみやすい和紙などの薄手の紙やコピー紙などの PPC（plain paper copy）用紙がふさわしい。

このフロッターージュを実践していく際のねらいについては以下3点を伝えた。

- ・身の回りのものの持つ地肌や手触り・模様気づく。
- ・その凹凸を鉛筆・クレヨンなどで擦ることによって出てくる模様に驚き楽しむ。
- ・色々な色や好みの色でその模様を作り、作品作りの素材として活かす。

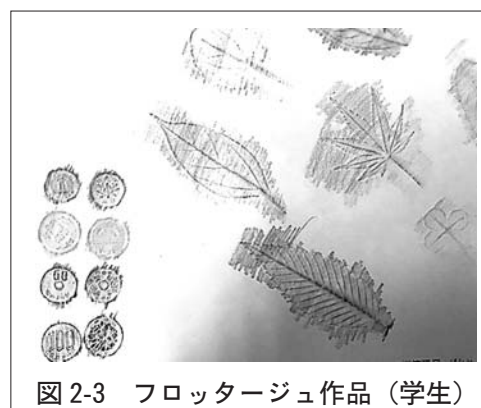


図2-3 フロッターージュ作品（学生）

教室を離れ、学生各自が学内にある凹凸を探しながら10個以上写し取る作業を行ったが（図2-3）、終了後の振り返りシートには、「凹凸は見たたり触ったりだけでなく上から写し取ることでその特徴がよくわかることに気づいた」「様々な凹凸でいろいろな模様が出来上がる楽しさを感じた」「素材が持つ固有色をフロッターージュすることで別の色に簡単に置き換えられる。オレンジ色の100円玉なども出来て子どもたちがいっぱい楽しめる」「普段何気なく見ている身近なものの観察になってとてもよいと思った」などを記しており、普段視覚で見ているだけでなく、素材の持つテクスチャを感じとらせることが出来た。

2-4. ドリッピング（Dripping）

紙の上に多目の水で溶いた絵の具をたっぷり落とし（ドリップ）、傾けたり、傾けトントンとたたいたりして図柄を作る技法。息を吹きかければ紙の上で絵の具が思いもよらない方向に走る（ブローイング）。この場合ストローを使って吹いたりすればやりやすく、筋状の模様ができる。色々な色で紙を動かしながら色々な方向から筋状に模様を増やしてみると面白い。また紙に対して垂直にストローを向けて強く吹くと色の中心から放射状に広がるような模様もできる。子どもにとって連続の吹きすぎは酸欠にならないよう注意する。

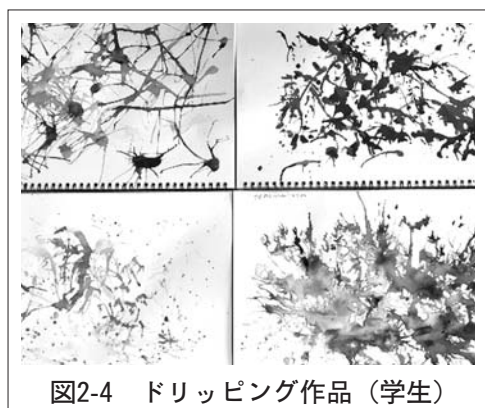


図2-4 ドリッピング作品（学生）

実践の際のねらいについては、以下の2点を取り上げた。

- ・絵の具をたらして傾けたり吹いたりしてできる形の面白さを感じる。
- ・行為を楽しみながら偶然できた形や様子から色の組み合わせなどを工夫したり、新たなイメージへ発展させていく。

終了後の振り返りシートでは、「傾けたり、吹いたりすると自分が思っている方向とは違う所に流れ、想像できない色水の動きがおもしろく楽しめた」「落とした絵の具の中心をストローで吹くといろいろな方向に流れ、花火のような形になって面白い」「普段使っているストローがこんな風に造形表現で使えることがわかった、設定保育で実践したい」など表現方法とその活動をとおした新たな発見と楽しさについても記されていた。

2-5. マーブリング (Marbling)

水面に油性絵の具や墨汁や彩液などを落として浮かせ、軽くかき混ぜて水面にできた模様を紙に写し取って模様を作る方法。手では描くことのできないその模様が大理石に似ていることからその名がついた。墨汁を水面に垂らして行う「墨流し」は古くから日本で行われており、大理石模様は白～黒であるため墨汁でもよい。

ただ、その模様がカラフルであれば色とりどりの不思議な模様に魅了されるし、子どもたちは目を輝かせる。使う色やかき混ぜ方などによってすべて異なる模様に驚きと喜びを実感する。そのことは意欲的な造形活動につながる重要な要素である。

準備物は、・水を入れるためのバット・きれいな水（1回するごとに水は替える）・彩液・フローティングペーパー

（彩液を水面に浮かすために落とす小さな紙）・かき混ぜる棒・写し取る紙・新聞紙（写し取った紙を置いたり余計な水分をとるため）などである。準備はすべて保育者が行い、子どもたちには彩液を垂らせたり、棒で軽くかき混ぜたり、年齢に応じて紙に写し取る作業をさせてもよい。低年齢児には保育者が一緒に手を携えれば行うこともできる。また、保育者が事前に作っておいて折り紙や貼り絵などの作品づくりに活かすこともできる。

マーブリングを実践していく際のねらいについては

- ・不思議な模様づくりを楽しむ。
- ・出来上がる模様の変化に驚きと色の組み合わせを楽しむ。
- ・作ったマーブリング模様を効果的な場所に貼ったり折り紙をして楽しむ。

終了後の振り返りシートでは、「始めてやったが、彩液が水面に浮かび、その模様を写し取ることができるとも感動した。」「名前は初めて知ったが、幼い時に保育所で行い、それを使って折り紙を折ったのを思い出した。実習でやってみたい」「わくわくしてやってみたが、想像よりきれいな模様で色が写し取ることが出来すごいと思った」「偶然にこんな不思議な模様が出来るとは思わなかった」などあり、意外と初めて体験する学生も多く、「きれい」「美しい」という声が教室内に溢れ、美しさとは何かといった再発見やもっとやってみたいという意欲にもつながった様にした。

2-6. スクラッチ (Scratch)

スクラッチ (Scratch) とは「引っかく」という意味の英語である。

画用紙にクレヨン (パス) で鮮やかな色を濃く何色も遣ってぬっていき (一層目)、上から黒色などの暗い色を全面にぬり (二層目)、先の尖ったもので削りだして図柄をつくる (スクラッチ)。ぬりこむのは幼児の手・指の訓練になるが、ある程度の労力が必要となるので、幼児に実施する際は小さめの画用紙を用意し、年齢に応じて大きさを変えて配慮していくことも必要である。一層目については同じ形で大きくぬるのではなく、鮮やかな色を小さな形でそれぞれぬっていくようにすればスクラッチした際に

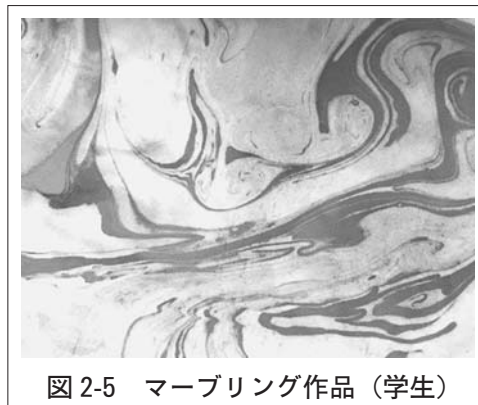


図 2-5 マーブリング作品 (学生)



図 2-6-1 スクラッチの制作手順①

多くの色の変化が楽しめる。一層目というより、いろいろな形を多くの色で画面に作ってそのデザインを楽しんでいくようにさせたい。

(図 2-6-1)

また一度にスクラッチまでさせるのではなく、一層目でのデザインを楽しみどんな作品ができたかをみんなで鑑賞する、二層目の黒を塗り込む作業ではぬるためのモチベーションもあった方がよい(例えば子どもたちが、どうして折角作った作品を黒でぬりつぶすのかの驚きに対し「夜になったから全部真っ暗になるよ」などの声かけする)、最後に削る(スクラッチ)というように3つの作業内容に分け、それぞれの段階での作品づくりを楽しんでいくようにする。



図 2-6-3 スクラッチの制作手順③

特にスクラッチ作業では、引っかくことで現れてくる美しい色の数々への発見と驚きがあり、そしてその色から湧き出

くる新たなイメージの創作活動の楽しさがある。削る際は、ペンによる線だけでなく、定規やヘラなどを使うことにより面で削りだした時の効果も体感することもできるので、子どもたちは安心して作業できる。



図 2-6-2 スクラッチの制作手順②

焦らないでそれぞれの作業にじっくりと時間をかけながら、主体的な子どもたちの意欲と創造性を培うようにしたい。

スクラッチを実践していく際のねらいについては、すすめる手順に沿って以下のように取り上げた。

- 様々な色をクレヨン(パス)でぬりこむ行為を楽しむ。(手・指の訓練)
- 黒ですべてをぬりこむ驚きとその行為を楽しむ。(手・指の訓練)
- 削ることによって出てくる線や色の発見に驚き楽しみながら絵を描いていく。

終了後の振り返りシートには、「ぬる作業が大変だったが、出来上がりに達成感を感じた、子どもには小さな紙でゆっくりと作成させてあげたい」「クレヨンの重ねぬりが出来ることを知る体験となり楽しかった」「削ると鮮やかな色が次々出てきてわくわくした」「間違っても黒をぬればやり直せるから子どもにはよいと思う」「子どもの頃とても好きだったスクラッチを出来て嬉しかった」「クシを使うことで自分のイメージが表現できた」とあり、幼児の頃に体験した造形表現の楽しさや削ることで表れてくる色の美しさや、失敗してもやり直せる気楽さから自由にのびのびと線や面の表現が出来ていた。

2-7. バチック (Batik)

クレヨン (パス) で描いた上から、水分の多い水彩絵具でぬるとクレヨン (パス) で描いた部分の油分が水彩絵具をはじく。この性質を活かしてクレヨン (パス) と水彩絵具の具とを併用して描いていく技法。クレヨン (パス) で形や模様などを描いておき、その上から水彩絵具の具で別の色や背景となる色をぬってあげればクレヨン (パス) で描いたものが消えることなく浮かび上がらせることができる。雨の風景を描くときに白い紙の上に白いクレヨン (パス) で点々を描いておき絵具をぬれば雨粒が浮かんでくるのも面白い。

2歳児位でも保育者が用紙と同じ色のクレヨン (パス) で描いておいて絵具をぬらせるとクレヨン (パス) で描いた線が浮き出てきて楽しめる。

バチックを実践していく際のねらいについては以下の3点を取り上げた。

- ・クレヨン (パス) のもつ特徴に気づく。
- ・上から絵具でぬっても描いた絵が消えないことに驚き楽しむ。
- ・先に形を描いてからも色づけできることから作品づくりの手助けとする。

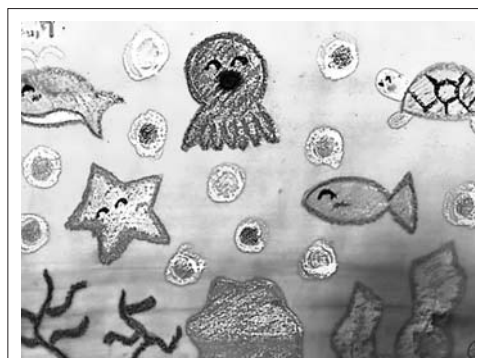


図 2-7 バチック作品 (学生)

終了後の振り返りシートでは、「クレヨンの上から絵具をぬると絶対に汚くなると思っていたが、クレヨンだけ浮き出てキレイに形が出た」「ひとつの絵で、クレヨンで描く楽しさと絵具でぬる楽しさの2種類があり、楽しさが倍になると感じた」、また「クレヨンの用具の特性が分かっていないとできないと感じた。用具の特性を知っていることが重要だと思った」なども記入されており、素材や用具の特徴を捉える機会となった。

2-8. コラージュ (仏: collage)



図 2-8-1 自然物を使ったコラージュ作品 (学生)

画面に紙・布・色々な素材・自然物などをのりで貼りつけて表現していく方法である。20世紀初頭のキュビズム (立体派) でピカソやブラックが始めたパピエ・コレ (貼り絵) を発展させたものといわれている。色紙や包装紙などを貼り付けて楽しんで構成してだけでなく、発展的に色々な素材を使うことで素材の持つテクスチャ (視覚的な風合い、つや、触覚的に感じられる凹凸感などの風味) を感じながら形や質感の面白さやそこから連想する見立て遊びにも使える。

(図 2-8-1) また、表現がむずかしいところには、マーブリングやにじみなどのモダンテクニックなどで作ったものを切って貼ることで感覚的なイメージを再現したり、広告や雑誌の写真を使って容易に画面を構成していくこともできる。これらを使うことで幼児にとって形を描く抵抗感も少なくなり、またそれらを貼ることでさらに新たなイメージが湧きでてくる。(図

2-8-2) 一部にコラージュを使う描画は、技術的な面のカバーとイメージの発展に利点がある。

今回授業での実践としては色紙を様々な大きさや形に切った三角形のみを使って画面上で組み合わせて「見立て」遊びを行った後に生まれたイメージやアイデアを基にして画面を構成しながらひとつの絵を作った。(図 2-8-2)

(後期の「造形Ⅱ」では、学内キャンパスで採集した自然物を使って見立て遊びを行い、その後コラージュして図 2-8-1 のような作品制作も各自行った。)



図 2-8-2 三角形を使ってのイメージコラージュ作品 (学生)

コラージュを実施していく際のねらいについては、以下の3点を抑えるようにした。

- さまざまな素材の模様や図柄、テクスチャ (マチエール・手ざわり・感触・質感) の面白さに気づく。
- それらの素材の持つ特徴からイメージを膨らませる。
- 切って貼り付けることで構成されていく画面を楽しみながら表現する。

終了後の振り返りシートには「ひとつの形でたくさんの形を表現できるなんて思いもしなかった。どんな形を作るか考えるのが楽しい」、「正直絵を描くのは苦手だけどコラージュは描くことなく、三角の形からいろんな形を作っていたので嬉しかった」「想像が膨らみ、発想が豊かになった」「子どもが簡単にできる技法だと思った」「ひとつの色の中に少し似た色を入れることで立体的に見えることを学んだ」などが記されており、単純な形からの発想と貼ることで描画表現できること、また色の組み合わせにより立体感が表現できるといった気づきなども見られた。

2-9. スパッターリング (Sputtering)

前期の「造形Ⅰ」では授業計画の関係上実施できなかったモダンテクニックの中の「スパッターリング」については、後期の「造形Ⅱ」の最初の授業で行ったのでそれについても少し記したい。

学生には次のように説明を行った。

金網の上から絵の具をブラシにつけてこすり、ぼかしや図柄を作っていく方法である。ひとつの色だけでなく、いろいろな色をかぶせていくことで描画では出来ない中間混合 (並置混合) の混色の美しさを表現できる。また、型紙を置くことにより (マスキング) 図柄の一部が出たり、意図的に形を作っていくことができる。スパッターリングしていく際のコツは、ひとつは絵の具の濃さ (絵の具と水の濃度) である。



図 2-9 スパッターリングの授業風景

水を入れすぎると跳ばないで金網の網目に色が詰まったり、画面に絵の具を落としてしまうので少し濃い目に溶いた絵の具 (ポスターカラー) を使う。

もう一点は、金網に絵の具をつけすぎないことである。多くつけると網目が詰まってしまって中々飛

ばない。飛ばないからといってさらに絵の具をつけてしまうとポタリと画面に落としてしまうという悪循環に陥る。金網に筆で少しずつ絵の具を置き、網目に絵の具がついていない側に向かってブラシでこするようにし、絵の具がなくなれば筆で少しずつつけていくようにすればうまくいく。

また、色を変えるごとに必ず金網や筆は絵の具をきれいに洗ってから布でしっかりとよく拭いて水気をとってから次の色を置くようにする。低年齢児でも保育者が子どもに手を添えて一緒にやるようにすればできる。いろいろな可能性を持っているので工夫を凝らせばエアブラシのような作品を作ることできる²⁾。

スパッタリングを実践していく際のねらいについては

- ・色を飛ばすことで、筆でぬるのとは違う効果を知り、その行為を楽しむ。
- ・別の色を重ねることで（中間混合で）混色されていく美しさを楽しむ。
- ・型を置くことで簡単に形が表現されることを知り、楽しく作品をつくる。

終了後の振り返りシートには「ぬったり描いたりするのは苦手だけど簡単できれいにできて嬉しい気持ちになった」「似ている色を少しずつずらして被せていくとグラデーションっぽくなってとても美しく見える」「マスキングすることで簡単できれいな形が作れた」「落ち葉などでマスキングしてもきれいに形ができると思う」「中間混合で幻想的な空間が描ける」などの感想が書かれており、描画では自身が技術的に表現しにくいものも比較的簡単に描くことができるこの技法を経験することで、夢中になり発展的に制作活動に取り組むことができたようである。

3. 考 察

幼児教育科に入学した学生については、初回の「造形Ⅰ」の授業において実施したアンケートで、「図工・美術が好き・やや好き」と回答している数も多く、保育を目指す方向としては好ましい状態であるといえる。ただ、「苦手・やや苦手」となるとその数は逆転する。その理由は「うまく表現できないから」といった回答が多くを占めていた。

造形表現については、将来、教育現場に立つ指導者として「表現に関する知識を知り、絶えず研鑽しながら表現能力を高めていく」ことは必要なことである。しかしながら、そのためには自らが表現していく喜びや楽しみを体験しながら表現意欲といったモチベーションを高めるとともに自身の造形表現に関する自信のなさを回復していくことにある。

今回、表現力の自信のなさから来る苦手意識や表現への消極的姿勢の打開としてモダンテクニックの知識と技法を取り上げることで、少なからず表現に対する意識改革につながることもできたと思う。と同時に、表現の多様性を知り、実際に教育現場で活用していきたいといった記述した学生も多数見られた。モダンテクニックはその作業単独で行っても十分に楽しい造形遊びである。幼児教育現場でこういった様々な技法を活用することによって筆では出せない味わいのあるものや偶然的な美しいものができる、様々なイメージにあった効果を出したりすることができるので子どもたちが形や色の発見とともに表現の手助けにもなる。ただ、単にその技法だけで終わらせるのではなく、それぞれで作ったもの

を乾燥保存し、別の画用紙や色画用紙上の画面に色々な形に切って組み合わせてコラージュしていくなどの方法で次の造形活動に発展的につなげ、子どもたちの表現活動のイメージの手助けをすることに効果的である。保育者として、保育現場でどのように活用していけばよいかなどを園の実態、年齢や発達、環境に即した教材研究などをしていくことが大切であり、実習や設定保育案などとおして考察し、現場で活かしてほしい。

この授業をとおして、表現技法だけでなく、表現の面白さや楽しさを知ることによって造形表現の苦手意識の軽減とともに関心や意欲の向上に寄与したが、こういったモダンテクニックの技法やその活用や応用だけでなく、将来子どもたちの前で造形表現活動を進めていく上で、クレパスや色鉛筆で描いたり、筆で水彩絵の具を彩ったりすることも多い。指導者としては、色彩の基本やものの立体としての基本構成、絵の描き方やデッサンなどの基礎的な知識や描画表現力を高めていくことも大切である。幼稚園や子ども園、保育所で子どもたちに「造形表現の場」を提供するだけでなく、教員自らがそのお手本を示したり、季節に応じた壁面構成や描画をしていく機会も多い。こういったときに保育者の造形表現能力が要求される。そのためにも表現する力をつけていくことは必至であり、それらの点の学びについては、今後本学の「造形Ⅱ」や2回生時に行う「図画工作Ⅰ・Ⅱ」において取り上げ、彼等の表現力の向上につなげていきたいと考える。

<注>

- 1) 吉垣隆雄(2017)「教員免許状更新講習をとおして幼児・児童の造形表現活動を考える」大阪千代田短期大学紀要46号に記載の教員免許状更新講習受講教員への事前調査に基づく。
- 2) 吉垣隆雄(2018)「スパッタリングによる表現方法と考察」大阪千代田短期大学紀要47号に詳細な授業実践報告で述べている。

<参考・引用文献>

吉垣隆雄(2017)「教員免許状更新講習をとおして幼児・児童の造形表現活動を考える」

大阪千代田短期大学紀要46号

吉垣隆雄(2018)「スパッタリングによる表現方法と考察」大阪千代田短期大学紀要47号